

峠

(上)

司馬遼太郎

新潮文庫



とうげ
峠
上 卷

定 価 480 円

新潮文庫 草 152 O

昭和五十年五月三十日 発行
昭和五十四年二月二十日 十 刷

著 者 司馬 遼 太郎
し ば りょう た 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一
さ とう りやう い

発 行 所 株式 会社 新 潮 社
しん せう しゃ

郵便 番号 一 六 二
東京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
電話 業 務 部 (〇三)二六六五一一
編 集 部 (〇三)二六六五四二一
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

峠

上 卷

司馬 太郎 著



新潮社版

2268

峠

上
卷

越後の城下

雪が来る。

もうそこまできている。あと十日もすれば北海から冬の雲がおし渡ってきて、この越後長岡の野も山も雪でうずめてしまいうにちがない。

(毎年のことだ)

まったく、毎年のことである。あきもせず季節はそれをくりかえしているし、人間も、雪の下で生きるための習慣をくりかえしている。

紅葉がおわろうとするこの季節、城下は冬支度で華やぐ。

(まったく、華やいでいやがる)

ひとびとの動きが、めまぐるしい。街路いっばいに薪売りの車がならぶし、家々の女どもは春までの野菜を一度に買いこみ、それを何十という樽に漬けてゆく。

相当な身分の武士までが、木にのぼっていた。木にわらを巻かねばならない。石燈籠にも巻き、寺などでは、こま犬にまでわらをかぶせた。城も、同様であった。

越後長岡は、牧野家七万四千石の城下である。天守閣はなかったが、お三階とよばれる本丸の楼閣が、市中のどこからでもみえた。それらの塀や建物の壁がむしろでつつまれ、ところどころに竹の押しぶちがあてられた。その雪よけの作業だけで、足輕や人夫などが日に五百人もはたら

いている。

継之助は、町をあるいていた。

（北国は、損だ）

とおもう。損である。冬も陽ざしの明るい西国ならばこういうむだな働きや費えは要らないであらう。北国では町中こうまで働いても、たかが雪をよけるだけのことであり、それによって一文の得にもならない。

が、この城下のひとびとは、深海の魚がことさらに水圧を感じないように、その自然の圧力のなかでにぎにぎしく生きている。この冬支度のばかばかしいばかりのはしゃぎかたはどうであらう。

（鈍重で、折れ釘や石ころを吞めといわれればのんでしまう連中だ。のむ前はさすがにつらい。つい大酒をくらう。大酒で勢いをつけ、唄でもうたつて騒ぎ、いざのみこんでしまつては、ぼろぼろ涙をながしている。——それが）

継之助は、つばをのんだ。

（越後長岡人さ）

継之助は途中、何人かの顔見知りの下級藩士に出あった。みなこの若者——といっても、部屋住みながら数えて三十二になるが——をおそれるように路傍に身を避け、小腰をかがめた。みな視線をあわせない。それほどに継之助の眼光はつねにきらきらとしている。

胸中、つぶやきの多い男だが、しかしその歩きざまはゆるゆるしたものではない。股立ちをとるように——とってはないが——道路の中央をさっさと歩く。武士はりりしくあらねばならぬという気風が、この藩は他藩にもまして濃い。歩き方まで、しつけられている。たとえにわか雨が

ふつてきても、軒端へにげこむのは町人で、藩士は逃げず、雪駄をふところにほうりこみ、道の中央をためらいもなく歩いてゆく。

城の西側に出た。

柿川という小さな流れを越え、城の外郭のなかに入った。

そこに、藩の首席家老の稲垣平助の屋敷がある。継之助は、わらぶきの門をくぐり、

「おい、おい」

と、玄関わきで木の手入れをしていた稲垣家の下男をよび、ゆっくりと親指をつき出した。

「おいでかね」

家老の稲垣平助殿は在宅か、という意味である。もう、これで三日も同じ用件でかよっている。

「ああ、そうか」

べつに落胆した顔でもない。当屋敷のあるじである首席家老稲垣平助は、親戚の法事に出かけているという。

「待つさ」

継之助は、門長屋から季節はずれの涼み台をもち出し、そのうえに寝ころんだ。枕は、下男のを借りた。

稲垣家のひとびとは、この河井継之助がなぜ毎日屋敷にやってくるかを知っている。江戸や諸国へ私費で遊学したい、というのだ。ところが、藩ではゆるさない。五年前、それをゆるしたところ、江戸藩邸の役人がはらはらするようなことばかりしかした、という。歴とした藩士が、よそで事件をおこしたとき、苦情は藩へもちこまれる。どうもこまる、というのである。

却下されたが、当の継之助はそれだけでひきさがらず、この国家老の屋敷に日参しては頼みこんでいる。

昼どきになった。継之助はふところから竹ノ皮包みを取りだし、それをひろげた。

——弁持だぜ。

庭木の冬支度をしている下男たちが、そつと袖をひきあつた。

奥の女どものあいだでも、それが話題になっている。ただ稲垣家は、女たちのしつけのみごとな家だから、批評がましい蔭口などはいわず、「座敷にあがっていただかねば」ということが論議の中心だった。いかに押しかけの客とはいえ、百石どりの歴とした士分の者に庭さきで食事をさせるなどということは、あつてよいことではない。結局、女中が使者に立った。

が、継之助のほうが、動かなかった。

——いや、このままで。

結構、というのである。

奥でも当惑し、せめて湯茶を、女中でなく一族の者が運ぼう、ということになった。それでもつて処遇するしかない。

稲垣家のあるじ平助の妹に、お夕きゆうというむすめがいる。年頃のころに病んだために婚期を逸していたが、その容色は城下でも評判であつた。

「……わたくしが」

と、お夕はその役を買って出た。なにげなさを粧よそわっていたが、家中からゆうの変りもので有名な河井継之助という男に興味がなかったとはいえない。

台所へ出て茶の道具をえらび、いそいでお茶を淹いれたつもりであつたが、そのときは庭がしず

かになっている。下男たちが、昼やすみをしているのであろう。

中庭をまわって玄関の横に出たとき、どっと笑う声がきこえた。

みると、涼み台の上に継之助があぐらをかいていた。いまひとり台の上に下男の貞吉がのぼり、膝ひざ小僧こぞうをそろえてむかいあっている。

枕引きをしていた。

箱枕の両はしをつかみあい、たがいにひっぱりあうのである。

他は、それを見物していた。たちまち継之助が勝った。

「では旦那サ、手前が」

と、宗十という下男が入れかわった。宗十は氣おいこみ、四本指で立ちむかったが、三本指の継之助にびつとひかれてしまう。

「おれに勝ったら、酒を一升か、まんじゅう二十買ってやる」

と継之助がいうと、みなわつと言った。その歓声が、お夕の耳に入っただのである。

(こまる)

とおもった。屋敷の風儀が、みだれるではないか。

ほどなく、稲垣平助がもどってきた。首席家老とはいえ、まだ若い。

稲垣家は、世襲の家老職である。平助はそれをついだだけだから、有能というわけにはいかないが、篤実で謹直な男だった。齢は継之助より三つ四つ上だろう。色の白い、いかにも名家の当主らしいすずやかな容貌をしている。

「お待たせしたようですな」

と、平素は下級者にも鄭重なことをつかう。しかし国家老の威厳はわすれず、言うべきことは、手きびしくいう人物で、いまでも、

「お夕からききました」

と言ひ、屋敷内で物を賭けて枕ひきをなされたそう、それはなりませぬ、あくまでもなりませぬ、といった。

「たかが枕ひきぐらい、とお手前のことだから、ご不満であらう。しかしそれでは当家の道が立ちませぬ」

稲垣平助にいわせると、武門とは秩序美だというのである。武士とは秩序美の体現者であり、それ以外に他の階級と区別されるものはない、というのだ。たとえば忠義も武士の専売ではなく、商家の手代にも無類の忠義者がいる。勇敢なことも武士だけのものではなく、江戸の火消しなどにもずいぶんと勇敢な者がいる。

しかしそれらには秩序美がない。

「武士のみが、そうです」

われわれは懸命にこの秩序美をまもらねばならぬ。その武士の屋敷で、物を賭けての枕ひきなどをされてはこまる、とおだやかにいった。

「しかし」

継之助は、まるで別なことをいった。

「ご家老はお仕合せでありますな」

「なぜだ」

「その武士の世が、ほろびようとしている。そのときにそれを憂えず、枕ひきはいかぬなどとい

う太平楽をのべておられる」

ときに、安政五年である。

江戸ではこの晩春、井伊直弼なほすけが大老に就任し、この中秋、幕権回復のためいわゆる安政ノ大獄といわれる思想弾圧を開始し、幕威はとみにあがった。その時期に、この百石取りの部屋住みは、武家の世はほろびるなどというおだやかならぬ予言を口走っている。

「おみしやん（おまえさん）は、それだから藩外に出せぬ」

「申しておきますが、私は流行の尊王かぶれではござらぬ。流行はきらいだ」

従って佐幕でもない。そういう単純な鑄型にみずからはまって満足できる者は仕合せなるかな。私はそうはいかぬ。藩は今後どうあるべきか、侍はいかに生くべきか、そのみが気がかりで夜もねむられぬ。

「藩外に出してもらいたい。藩外でものを考えたい」

「その返事は、きのう致したとおりです」

「では、あす、いま一度参りましょう」

「なん日来られてもおなじだ」

「いいや、明後日、その次も参上つかまつる」

「待った。そのこと、べつに藩外に出るご必要はあるまい。藩内で考えられてはどうか」

「人間をごぞんじない」

継之助は、色のあわい、鳶色とびいろの瞳ひとみを大きくひらいていった。人間はその現実から一步離れてこそ物が考えられる。距離が必要である、刺戟しげきも必要である。愚人にも賢人にも会わねばならぬ。じっと端座はなだしていて物が考えられるなどあれはうそだ——と継之助はいった。

稲垣国家老は、根負けがしたらしい。ついに折れ、江戸出府と諸国遊歴をゆるすことにした。

「いやなやつだ」

継之助が辞去したあと、国家老の稲垣平助は、ひとりつぶやいた。小さな中庭のすみで、水仙が芽を出している。もう大雪がくるというのに、いまだき芽を出したりして、どうするつもりだろう。

「おや」

と、そのことを、つぎの間で茶を淹れかえていた妹も気づいたらしい。「水仙が、芽を」といった。

「そう、芽を出している」

「河井様とは風変わりなお方でございますね」

と、茶がらを移しながら、話題を変えた。その話題に触れたくて茶を淹れにきた様子でもある。「変っている」

愉快そうな声音ではなかった。稲垣平助は——武士は他人に対し好悪をあらわしてはならない、とくに国家老の立場にある者はそうである、というしつけを少年のころから受けてきた。だから懸命に自分をおさえているが、声音まではごまかせない。

が、ともかくも不愉快であった。あの男は先刻、おのれが藩外に出たいばかりに、それを許可せぬ自分をなんと無能よばわりした。八つあたりというべきであった。国家老は、ものを考えぬという。藩の危機を考えぬという。

——藩に危機などがあるか。

と言いかえすと、あの男は大声をはりあげ、三百年の徳川の天下がいま崩れようとしている、歴史がかわる、日本のあすも知れぬ、七万四千石の越後長岡藩だけがその埒外うちがわいに生きられるとおもいか、お思いとすればこれはまあ結構な国家老様でありますこと、といった。なんという雑言ぞうごんだろう。自分が江戸へ出たいの一心で、ひとをそのように傷つける。

——江戸でなにをするのか。

——というと、

——吉原よしわらで女郎買やうらうかいいをする。

といった。本心か、なにか寓意ぐういがあるのか、それともこの稲垣平助をからかっているのか、そこはわからない。

「……どこか」

妹のお夕も、考えこんでしまっているらしい。「変へっていらっしやるのでございましょう」と言いながら、能登の塗りお盆に小さな煎茶茶碗せんぢあわをのせた。

「そうだな」

腕を組んだが、じつは稲垣平助には答えが出ている。かの継之助めは物事を考えすぎるのである。あの男は、自分が人間にうまれたことさえ、まるでそれが自分の責任であるように血相をかえて考えている。武士にうまれたことについても考え、長岡藩士にうまれたことについても、まるで焼け鉄板の上にのせられたにわとりのような狂躁きやうそうぶりで考えている。

「そういう根本義を、武士は考えてはならぬのだ。町人も百姓も、嫁も姑いもうとめも、ものを考えてはならぬ。それが、美德なのだ」

と、平助はいった。でなければ封建制度はくずれる。この制度は三百年前家康が作り、身分も

道徳も鉄のたがをはめたように固定させた。人は鉄のたがのなかで生きねばならない。そう生きてゆくところに暮しの平穩があり、世の無事がある。

「あの男の罪は、おのれの足もとから世のさきざきのことまで考えすぎている。それがあの男の悪徳になっている。あの男がそのあたりをうろつくかぎり、家族をも、人をも、世をも、不幸にするだろう」

継之助の屋敷は、堀のうちに大きな松がそびえている。

門を入ると、父の代右衛門が庭石に腰をおろし、下男を指揮して松にわらを巻かせていた。

「もどったか」

代右衛門は、いった。庭木を育てることと茶器刀剣のめききができるというほかなんの能もない人物だが、しかし御役所はつとまっている。いま、藩の御勘定奉行をつとめていた。

継之助は目礼し、奥へ入った。妻のおすが居間にいた。

「母上は？」

継之助はきいた。母をお貞といい、無類のしっかり者で、河井家はこの婦人でもっているときえいわれていた。

「ただいま、牧野へ」

と、おすがはいった。牧野とは、河井家の妹娘のお八寸の婚家である。そこへお貞は出かけたという。

「そいつは都合がいい」

継之助は、茶道具すきの父よりも、女だてらに四書五経を誦誦しているという、この母親のお

貞のほうがにがてだった。

「話がある」

「わたくしに、でございますか」

おすがは、正直なところおどろいた。この夫が、こんなことを言いだすのは、かつてない。おすがは数えて十六歳のときに、おなじ家中の棚野家から興入れしてきたが、その当時あまりの子供だったせいか、継之助はろくに話相手にもなってくれなかった。それが癖になって、いまだにこの夫はおすがをこどもだとおもっているらしい。

「お話とは？」

「いい、おすがはうれしくなり、心持、継之助に寄りそうようなしぐさをした。

「留守をせい」

「継之助は、頭からいった。

「五、六年、留守をせい。話とはそれだけだ」

それだけで、この風変りな夫は立ちあがろうとした。おすがは、あわてて腰を浮かした。それだけでは藪から棒で、なんのことだかわからない。

継之助は、立っている。それだけで実は切りあげるつもりだった。心のうちを言ったところでおすがにはわかるまいし、多くを語れば語るほど、こんな亭主をもったおすがの哀れがわが身にかえってきて堪えられない。

「一体、どこへ参られるのでございます」

「信濃川をちよつとのぼったところだ」

その川は、この越後長岡の郊外を流れているから、いくら世間せまいおすがでも知っている。